



Title	マイナー言語を半期だけ教える時に教える10のこと：バンバラ語を学ぶ学生のための類型論
Author(s)	小森, 淳子
Citation	外国語教育のフロンティア. 2023, 6, p. 175-189
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マイナー言語を半期だけ教える時に教える 10 のこと －バンバラ語を学ぶ学生のための類型論－

**Ten things to teach when I teach a minor language for just one semester:
Typological lessons of Bambara language**

小森 淳子

Abstract

When I teach a “minor language” like Bambara, a lingua franca of Mali in West Africa, for just one semester, to students who are not necessarily eager to learn it, the aim would not be for them to gain facility in the language itself. I lecture on Bambara language from the viewpoint of linguistic typology and encourage students to compare it with languages that they already know, according to topics that are typologically interesting. The 10 topics from Bambara language I choose for lectures in class are; 1) the format of greetings, 2) copula sentences, 3) possessive sentences, 4) the basic word order, 5) possessive noun phrases, 6) order of adjective and noun, 7) case marking of nouns and pronouns, 8) types of adjectives, 9) passive constructions, and 10) relative constructions. These topics are especially interesting in Bambara grammar and also help students to understand languages from the perspective of linguistic typology.

キーワード：言語類型論、マイナー言語、バンバラ語

0. はじめに

ここでいう「マイナー言語」とは、日本では一般にあまり知られておらず、外国語学部の学生でもその名前を聞いたことがないような言語、というくらいの意味で、実際にその言語自体が「マイナー」というわけではない。

筆者は、スワヒリ語専攻の3、4年生が選択履修する専攻科目の「西アフリカ諸語演習」という授業を担当している。西アフリカの言語を取り上げて教える語学の授業であるが、2017年からはマリのバンバラ語を教えている。半期ごとにa, bと分かれていって、前期のaか後期のbか、いずれか半期だけ履修する学生が大半である。また、「学部共通科目（地域系科目）」にもなっており、近年はスワヒリ語専攻以外の学生の履修も増えている。

履修の動機としては、「東アフリカのスワヒリ語だけでなく、西アフリカの言語にも興味がある」というようなスワヒリ語専攻の学生もいるが、最近は、「時間割の都合で、ここに授業をいれたかったので」という、単位取得だけが目的の、スワヒリ語専攻以外の学生もいる。そのような学生の中には、この授業で何語が教えられるかも知らず（つまり、シラバスもしっかり確かめず）、「え、バンバラ語？ それってどこで話されているんですか？」という、非常に関心度の低い状態で授業にやってくる学生もいる。

このように関心度の低い学生から、「西アフリカの言語も知りたくて」くらいの中程度の関心度の学生に対して、「マイナー言語」であるバンバラ語を半期だけ教える時、何を目標に掲げればいいだろうか。バンバラ語自体の習得をめざすには、動機的にも時間的にも無理があり、また実際、そのようなことには需要もなく、望むべくもない。

そこでこの授業の目標を、バンバラ語を通じて言語の類型論的な見方を養い、日本語や英語をはじめ各自の専攻言語などを客観的にみることができるようになる、というものにした。バンバラ語の文法説明や会話文の練習をしながら、バンバラ語の特徴的な文法項目について類型論的な観点から説明し、学生たちには、各自が知っている他の言語と比較しながら考察し、個別言語を類型論的な観点から理解できるようになってほしいと考えた。

本稿では、そのような授業の中でおこなったバンバラ語についての言語類型論的な説明を、10 の項目に分けて概説する。取り上げる項目は、形態、統語、語順に関することが中心となるが、それは言語類型論の中でも中心的な項目であり、またバンバラ語の文法の特徴もそこにみられるからである。

1. 授業の中で取り上げる 10 の項目

バンバラ語は西アフリカのマリで話されており、母語話者はおよそ 400 万人といわれるが、マリの広い地域で用いられているので、母語話者以外も含めると話者人口は 1400 万人以上にのぼる (Simons and Fenning 2017)。マリで共通語として用いられる「メジャー」な言語で、ローマ字による表記法も確立しているが、書記言語として用いられることはあまりなく、学校教育やマスメディア、公的な場の言語としては、公用語のフランス語にその地位を譲っている。ニジェール・コンゴ語族、マンデ語派に属し、セネガルのマンディンカ語（マリンケ語）、ギニアのマニンカ語、シエラレオネやリベリアのマンディング語、コートジボワールのジュラ語とは近い方言関係にある。

以上のようなバンバラ語の背景を、地図などを用いて説明したのちに、言語の説明に移るわけだが、定石通り、表記法や「挨拶」の説明から入り、毎回簡単な会話文を例に、バンバラ語の文法説明をおこなっていく。以下に、代表的な例文をあげながら、10 の項目に分けて、バンバラ語の特徴的な文法項目をみていく。

なお、専攻語のスワヒリ語（ニジェール・コンゴ語族、ベヌエ語派、バントゥ諸語）や他のアフリカの言語、日本語や英語との比較だけでなく、世界の言語の中での位置づけや、類型的な傾向をみるために、松本 (2006) や、オンラインのデータベース WALS (The World Atlas of Language Structures) Online を隨時、参照している。WALS Online はマックスプランク進化人類学研究所の言語文化部門によるデータベースで、音韻や形態、統語、語順、語彙などに関する 144 の項目について、世界の言語にみられるタイプや、その地理的分布が地図で示されており、利便性が高い資料である。

1.1 「おはようございます」：表記と挨拶

バンバラ語の表記法は、発音記号を取り入れたローマ字表記なので、母音の [ε] や [ɔ]、鼻音の [ŋ] や [ŋ̊] を知っていれば、すぐに読める。世界の言語で最も多いのは 5 母音体系であり（松本 2006:166）、日本語やスワヒリ語は、もっとも標準的な母音

体系であると言える。日本語話者がスワヒリ語を学ぶ時には、母音に関してはほとんどストレスがないが、7母音体系のバンバラ語は、「エ」と「オ」を発音する時に、口の開きが狭い[ɛ]と広い[ε]、狭い[o]と広い[ɔ]という区別を意識しなければならない。それでも英語やフランス語などの欧州系の言語に比べれば、母音の習得にはストレスが少なく、また子音についても、ごく標準的な数と音形ばかりである。アフリカの言語は高低アクセント（いわゆるトーン）が重要である場合が多く、バンバラ語は高、低の2つのアクセントを区別する。正書法では、低アクセントのみをàのように付す。

表記と発音の説明ののちは、まず挨拶表現である。挨拶表現には定型があるが、主に、挨拶場面の時間帯や状況を表す表現と、相手のことを尋ねる表現に分けられる。前者は Good morning. や「おはようございます」、後者は How are you? や「お元気ですか」などである。バンバラ語の挨拶表現の特徴は、前者の挨拶表現のバリエーションが豊富なことである。定型表現の型があって、その型の中の単語を入れ替えることによって多くの挨拶表現をつくることができる。定型表現の型は I ni ~ . で、～のところに時間帯や相手の状況などを表わす語が入る。

- (1) I ni sògomà. 「おはようございます」
I ni tile. 「こんにちは」
I ni su. 「こんばんは」

iは「あなた」、niは「と」で、文字通りは「あなたと～」という意味であるが、挨拶に特化した表現である。sògomà「朝」やtile「昼」、su「夕方、夜」は分かりやすいが、他に baara「仕事」、se「到着」、bòli「走り、運転」、taama「歩き、旅」、sègen「疲れ」、dàba「鍵」、kàlan「勉強」、fàma「ご無沙汰」など、相手やその場の状況を指すさまざまな語が入り、挨拶表現が生産的に作られる。

このような挨拶表現の型は、ナイジェリアのヨルバ語（ニジェール・コンゴ語族、ベヌエ語派）にもみられる。ヨルバ語の定型表現の型は ε kú ~ . であり、～のところに、「朝」、「昼」、「夕方」など時間帯を指す語をはじめ、「暑さ」や「市場」といったその場の状況や、「立っている」、「座っている」など相手の状態を表す語などが入り、多くの挨拶表現を作ることができる。スワヒリ語の挨拶表現にも Habari ya ~ ? という疑問形の型があり、～のところにさまざまな語が入る。Habari (ニュース) ya (の) asubuhi (朝) ? で「おはようございます」という挨拶になる。アフリカでは挨拶は特に重要で、これらの定型の挨拶表現を交わし合うだけでなく、さらに相手の状況を尋ねる表現が続き、何往復も挨拶を交わし合う。生産的な挨拶表現の型があるというのも、挨拶が重視される文化と無関係ではないと言えよう。

1.2 「私は学生です」：コピュラ文

コピュラ文とは、「A は B です」のように、主語と述語にあたる2つの名詞をつなぐ文で、普通はコピュラが用いられる。コピュラは、英語の Be 動詞や日本語の「です、だ」のように動詞を用いる場合や、ヘブライ語やトルコ語のように代名詞的なもの要用いる場合、スワヒリ語やヨルバ語のようにコピュラ小辞（繫辭）を用いる場合がある。

WALS によると、コピュラが用いられず、名詞 A と名詞 B が並列されるだけの「ゼロ・コピュラ」の言語も多くみられ、世界の言語の約 45% (386 言語中 175 言語) でゼロ・コピュラが可能なようである (Stassen 2013b)。

バンバラ語は繋辞 *ye* を用いるが、B の名詞を囲むように *A ye B ye.* という形になる。このような形式はやや珍しい部類にはいるだろうか。

- (2) N *ye* *kàlanden* *ye.* 「私は学生です」
私 COP 学生 COP

スワヒリ語では繋辞 *ni* が用いられ、*A ni B.* 「A は B です」という形になるが、繋辞は省略も可能で、また、*A なしで*、*Ni B.* 「B です」という表現も可能である。

(3) スワヒリ語の例

- a. Mimi *ni* *mwanafunzi.* 「私は学生です」
私 COP 学生
b. Mimi *mwanafunzi.* 「私は学生です」
私 学生
c. Ni *mwanafunzi.* 「学生です」
COP 学生

興味深いことに、バンバラ語で (3c) のような表現をする時は、*ye* とは異なる断定詞 *dòn* を用いて次のように表現する。

- (4) *Kàlanden* *dòn.* 「学生です」
学生 PRD

断定詞 *dòn* は前の語を提示する機能があるが、次の (5) のように主語の状態を叙述するような文にも用いられる。

- (5) À *sigi-lén* *dòn.* 「彼は座っています」
彼 座る -PERFP PRD

dòn は動詞ではないが、上の例をみると、英語や欧州系の言語の Be 動詞や、日本語の「です、だ」に似ているようにみえる。2つの名詞をつなぐわけではないので、コピュラとは呼べないかもしれないが、(3) のように、他の言語では1つのコピュラが表す表現に、バンバラ語では2つの形式があるというのは、注目に値する特徴と言えそうである。

1.3 「私はお金を持っています」：所有文

所有文は、類型的に大きく2つに分けられる。所有者 A が主語になるタイプと、

所有物 B が主語になるタイプである。前者は、have などの動詞を用いて「A は B を持っている」に相当する文、後者は、Be 動詞などを用いて「B は A にある」に相当する文である。WALS によると、240 言語中、前者の「所有者主語」タイプが 118 言語、後者の「所有物主語」タイプが 122 言語で、ほぼ半々くらいである (Stassen 2013a)。

前者はさらに、have や「持つ」のような動詞を用いる場合と、動詞ではない語（たとえば with に相当するような語）を用いる場合に分けられる。スワヒリ語では動詞でない語 na に主語接辞をつけて表す。

(6) スワヒリ語の例

Ni-na	pesa.	「私はお金を持っています」
SM.1s-with	お金	

バンバラ語は後者の「所有物主語」タイプで、「B は A にある」という存在文に相当する形で所有文を表す。下の例のように、存在を表す動詞 bɛ と後置詞 fɛ を用いて表す。

(7) Wari	bɛ	n	fɛ.	「私はお金を持っています」(lit. お金が私にあります)
お金	Be	私	pp	

英語や日本語、スワヒリ語のような「所有者主語」タイプに慣れていると、この「所有物主語」タイプの表現は、慣れるまで少し戸惑う。しかし、日本語でも「私には兄がいる」や「姉には音楽の才能がある」など、「所有物主語」タイプの表現があるので、このタイプと同じだと思えば、戸惑いも薄れてくるが、それでも「私には」や「姉には」のように「所有者」が先にくるので、所有者が最後にくるバンバラ語に慣れるのには、やはり時間がかかる。とはいっても、所有文に関しては、逆に、日本語のバリエーションに気づかされるのである。

1.4 「私はバンバラ語を学びます」：基本語順

言語類型論の中でも、「語順」はグリーンバーグの研究を嚆矢とする中心的なトピックで、主語 S・目的語 O・動詞 V の 3 つの基本語順と、他の要素の語順（名詞と修飾語など）との相関関係が重要なテーマの 1 つである。調査する言語数によって違いはあるが、世界の言語の基本語順は、SOV 語順が約 50% と最も多く、次いで SVO 語順が 35%、VSO 語順が 11% と続く（松本 2006:211）。

アフリカ大陸の言語では、世界の傾向とは逆に、SVO 語順が約 65% と最も多く、次いで SOV 語順が約 24% である（松本 2006:210）。下の (8) のように、バンバラ語の語順は SOV 語順であり、これはバンバラ語が属するマンデ語派の特徴である。

(8) N	bɛ	bamanankan	kàlan.	「私はバンバラ語を学びます」
私	PRES	バンバラ語	学ぶ	

SOV 語順は、主要部である動詞が従属部である目的語の後ろにくる「主要部後置型」

の語順であり、他の主要部と従属部(たとえば名詞と修飾語など)の語順も主要部後置になる傾向がある。トルコ語やモンゴル語などのアルタイ諸語や日本語は、典型的な「主要部後置型」の SOV 言語である。一方、バンバラ語は、典型的な SOV 言語と比べると、そこから外れる点がある。

まず、動詞の時制や相、否定などを表す補助詞的な要素であるが、典型的な SOV 型では、それらの要素は動詞の後ろにくる。バンバラ語では、(8) の *be* (「現在」を表す補助詞) のように、動詞の後ろではなく、主語の後ろにくる。(9) の例のように、否定や完了などの補助詞も主語の後ろにくる。

- (9) a. N tε bamanankan kàlan. 「私はバンバラ語を学んでいません」
 私 NEG バンバラ語 学ぶ
 b. N ye bamanankan kàlan. 「私はバンバラ語を学びました」
 私 PERF バンバラ語 学ぶ

自動詞の場合は、(10b) のように完了の補助詞だけ動詞の後ろにつく。この点だけは SOV 型の特徴といえるかもしれないが、下の例の「セネガル」のように、自動詞の補語は動詞の後ろにくる。これは典型的な SOV 型から外れる特徴である。

- (10) a. N bε taa Sènegali. 「私はセネガルへ行きます」
 私 PRES 行く セネガル
 b. N taa-ra Sènegali. 「私はセネガルへ行きました」
 私 行く -PERF セネガル

また、バンバラ語は後置詞を用いる。これは SOV 型の特徴であるが、典型的な SOV 型であれば後置詞句は動詞の前にくるが、バンバラ語では動詞の後ろにくる。

- (11) a. N bε baara kε Màli la. 「私はマリで仕事をしています」
 私 PRES 仕事 する マリ pp
 b. N bε taa Sènegali sisikurun fè. 「私は列車でセネガルへ行きます」
 私 PRES 行く セネガル 列車 pp

つまり、バンバラ語は SOV 語順ではあるが、典型的な SOV 型とは異なる点 — 補助詞の位置が動詞の後ろではなく主語の後ろ、自動詞の補語や後置詞句が動詞の後ろにくる点 — がみられるということである。これは、バンバラ語が元来の SVO 語順から変化して SOV 語順になったことが関係していると考えられる (Creissels 2000:252)。

次の 1.5 節と 1.6 節では、名詞と修飾語の語順をみると、これも典型的な SOV 型であれば、修飾語(従属部)が前にきて名詞(主要部)が後ろにくる語順になる。バンバラ語では、修飾語が「所有者」である場合は、典型的な語順になるが、「形容詞」などは逆の語順になる。まずは、典型的な語順である所有者と名詞(所有物)の語順からみていこう。

1.5 「私の車・私の腕」：所有者と所有物

「私の車」のように、修飾語が「所有者」である場合、バンバラ語では「所有者」が前にくる。これは典型的な SOV 型の語順である。

所有者と所有物からなる名詞句には、一般に、日本語の「の」や英語の of's のように、所有関係を表す標識があらわれるが、バンバラ語では譲渡可能物か、譲渡不可能物かによって、標識の有無が異なる。譲渡可能物では、所有関係を表す標識 *ka* が間にに入る。

(12) 譲渡可能物の例

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| a. n ka mobili 「私の車」 | b. cè ka so 「男の家」 |
| 私 POSS 車 | 男 POSS 家 |
| c. n ka sìgilan 「私のいす」 | d. i ka wari 「あなたのお金」 |
| 私 POSS いす | あなた POSS お金 |

譲渡不可能物の場合は *ka* は入らず、単に 2 つの語が並列される。譲渡不可能物とは、文字通り、人に譲り渡すことができず生来「所有」している物で、「腕」や「歯」のような身体部位を表す名詞や、「父」や「母」のような親族を表す名詞が含まれる。

(13) 譲渡不可能物の例

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a. n bolo 「私の腕」 | b. cè jin 「男の歯」 |
| 私 腕 | 男 歯 |
| c. n fa 「私の父」 | d. i ba 「あなたの母」 |
| 私 父 | あなた 母 |

WALS によると、所有物の譲渡可／不可という違いによって所有構造が異なる言語は、ユーラシア大陸にはあまりみられないが、アフリカ大陸やアメリカ大陸、メラネシアからオーストラリア大陸でよくみられ、世界の言語の約 39% (243 言語中 94 言語) あるらしい (Nichols & Bickel 2013)。譲渡不可能物は身体名称や親族名称などの限られた語彙であり、他の一般的な語彙より、所有構造が「短く」なる傾向がある。バンバラ語では、所有の標識である *ka* をとらないという「短い」形で表現されるということである。

1.6 「白い車」：名詞と形容詞

典型的な SOV 型では、形容詞などの修飾語が名詞の前にくる「形容詞－名詞」語順が一般的であるが、バンバラ語では逆に、修飾語が後にきて「名詞－形容詞」の語順になる。

(14) a. mobili jeman 「白い車」

車 白い

b. mobili fila 「2 台の車」

車 2

世界の言語では、約 65% がこの「名詞－形容詞」語順で、「形容詞－名詞」は約 35% と少ない (松本 2006:212)。SOV 語順が一番多いことと相関していないが、そもそも名

詞と形容詞の語順は、他の語順との高い相関性がみられないようである。

スワヒリ語やヨルバ語などは、アフリカにもっとも多い SVO 語順であり、典型的な SVO 型、つまり「主要部前置型」を示す。前置詞を用い、名詞を修飾する語は、所有者も形容詞も名詞の後ろである。一方、アフリカの諸言語の中で、典型的な SOV 型は少なく、イジョ語（ニジェール・コンゴ語族、イジョ語群）やサンダウェ語などのコイサン語族の言語にみられるのみである（Creissels 2000:253）。

角田（1991）では、典型的な SVO 型としてタイ語を、典型的な SOV 型として日本語をあげ、それらと対比させながら、英語が一貫性のない語順タイプであることを述べている。同じように、アフリカ諸語の中でも、ヨルバ語のような典型的な SVO 型と、イジョ語のような典型的な SOV 型を対比させながら、バンバラ語が一貫性のないタイプであることを示すことができるだろう。ただし、バンバラ語のこの特徴－後置詞をとり、所有詞は名詞の前、形容詞は後ろ－は、西アフリカの地域的な特徴であり、SVO/SOV 語順に関わらず、マンデ語派やクワ語派などの諸言語に広くみられるようである（Creissels 2000:252）。

1.7 「私を助けて」：格変化

これまで挙げたバンバラ語の例をみても分かるように、代名詞「私」は、主語の位置にきても（ex. (8)）、後置詞の前にきても（ex. (7)）、所有者の位置にきても（ex. (12)）、すべて n という形である。もちろん、目的語の位置にきても n である。

(15)	N	dèmε.	「私を助けて」
	私	助ける	

(15) は目的語 n「私」が前にきている命令文である。「私が助ける」のような意味にならないのは、「現在」を表す補助詞などがなく、「私」は dèmε「助ける」の目的語として解釈されるからである。

このようにバンバラ語では、代名詞でも、そして名詞でも、格変化がみられない。名詞や代名詞に格変化がみられないのは、古典的な類型論の「孤立型」の言語にみられる特徴で、中国語がよく典型例に出される。英語でも、John killed the bear. の John や the bear のように名詞には格変化がみられないが、代名詞には he や him のように格変化がみられる。

ヨルバ語やスワヒリ語も、名詞は格変化しないが、代名詞や代名詞に相当する接辞では、主格と対格で形が異なる。また、所有代名詞も異なる形があり（(16) 参照）、バンバラ語のように、所有の標識を伴うことはあっても、代名詞自体が変わらないということはない。

(16) スワヒリ語の例

- a. A-na-ku-penda. 「彼はあなたを愛する」 (3s 主格 a-、2s 対格 ku-)
SM.3s-PRES-OM.2s- 愛する
- b. U-na-m-penda. 「あなたは彼を愛する」 (2s 主格 u-、3s 対格 m-)

SM.2s-PRES-OM.3s- 愛する

- c. kitabu ch-ako 「あなたの本」(2s 所有代名詞 -ako)
cl.7. 本 cl.7- あなたの

欧洲系の言語やアルタイ諸語のように、格変化が当たり前というのに慣れていると、バンバラ語のように、代名詞も一切、格変化しないというのは、なんだかとても「ツルツル」した感じで、主語や目的語を一瞬とり違えそうになったりする。

ちなみに、WALSによると、名詞に格変化がみられない言語は、世界の言語の約 52% (190 言語中 98 言語) もあるらしい (Comrie 2013)。一方、代名詞に格変化がみられない言語は、約 46% (172 言語中 79 言語) で、代名詞の方が若干、「格変化無し率」が低い。つまり、代名詞の方が名詞より格変化がみられる、ということだが、それがバンバラ語の「代名詞まで格変化しないなんて」という感覚を生じさせているような気がする。

言語類型論の中でも、名詞の格変化や、格配列（自動詞／他動詞の主語、目的語などがとる格）は主要なテーマの 1 つであるが、バンバラ語は何も貢献しないといって過言ではないくらい関与していない。それだからこそ、他の言語の格変化にあらためて目を向ける機会になり、また、世界の言語の半分くらいは、同じように格変化に「疎い」ということにも、あらためて気づかせてくれるのである。

1.8 「この車は白い」：形容詞のタイプ

大きい、小さい、白い、赤い、良い、悪いのような「形容詞」について類型的にみる時、形容詞が名詞に近いタイプか、動詞に近いタイプかという分類ができる。松本 (2006:314) は前者を「形容詞体言型」、後者を「形容詞用言型」と呼んでいる。

「形容詞体言型」は、スペイン語などのイタリック語派の諸言語やスワヒリ語をはじめとするバントゥ諸語が典型的であるが、形容詞が名詞と「一致」して、名詞と同じ形になる。叙述の述部になる時は、コピュラが用いられる。下のスワヒリ語の例の (17a, b) は、「形容詞」が名詞を修飾している例、(17c, d) は、叙述に用いられている例である。

(17) スワヒリ語の例

- | | |
|--|---|
| a. m-toto m-kubwa
cl.1- 子供 cl.1- 大きい
「大きい子供」 | b. gari j-eupe
cl.5. 車 cl.5- 白い
「白い車」 |
| c. M-toto huyu ni m-kubwa. d. Gari hili ni j-eupe.
cl.1- 子供 cl.1. この COP cl.1- 大きい cl.5. 車 cl.5. この COP cl.5- 白い
「この子供は大きい」 「この車は白い」 | |

「形容詞用言型」は、「形容詞」と思われるものは基本的に動詞であり、叙述表現で述語になる。日本語もこのタイプに分類されるようだが、朝鮮語から中国語、東南アジアの諸言語、西アフリカの諸言語に広くみられる。ヨルバ語では下の (18a, b) のように「形容詞」は自動詞として叙述に用いられる。名詞を修飾する場合は (18c, d) のよう

に、動名詞形になる（小森 2012）。

(18) ヨルバ語の例

- | | |
|------------------|-----------------|
| a. ɔmɔ náà tóbi. | b. εja náà dùn. |
| 子供 その 大きい | 魚 その おいしい |
| 「その子供は大きい」 | 「その魚はおいしい」 |
| c. ɔmɔ tí-tóbi | d. εja dí-dùn |
| 子供 NOM- 大きい | 魚 NOM- おいしい |
| 「大きい子供」 | 「おいしい魚」 |

バンバラ語も「形容詞用言型」で、「形容詞」は基本的には動詞である。筆者はこれを「形容動詞」と呼んでいる。形容動詞は述語として叙述に用いられるが、他の動詞とは異なる点がある。動詞文には補助詞があらわれ、自動詞／他動詞文の「現在」を表す補助詞は *be* である。一方、形容動詞文の補助詞は *ka* である。下の (19a) は他動詞文、(19b) は自動詞文、(19c) は形容動詞文である。

- (19) a. N be bamanankan kàlan. (= (8)) 「私はバンバラ語を学びます」
 私 PRES バンバラ語 学ぶ
- b. N be taa Sènegali. (= (10a)) 「私はセネガルへ行きます」
 私 PRES 行く セネガル
- c. Nin mobili ka je. 「この車は白い」
 この車 PRES 白い

また、名詞を修飾する場合は、形容動詞が名詞形になる。

- (20) mobili je-man (= (14a)) 「白い車」
 車 白い -NOM

このように、バンバラ語では、「形容詞」は基本的には動詞と同じ部類に属すると考えられるが、他の動詞と異なる点があることから、「形容動詞」という別名をつけてみた。しかし、もっぱら名詞修飾にのみ用いられる語もいくつかあり、また、下の (21) の *kura*「新しい」のように、いかにも形容動詞っぽいのに、名詞修飾にしか用いられず、叙述にはコピュラが用いられる語もある（小森 2014）。

- (21) a. mobili kura 「新しい車」
 車 新しい
- b. Nin mobili ye kura ye. 「この車は新しい」
 この 車 COP 新しい COP
- c. *Nin mobili ka kura.
 この 車 PRES 新しい

この kura「新しい」は、少し古い文献をみると、もともと形容動詞であったようなので、「名詞的」なものに変化してきたようである。「形容詞」というのは、言語によって名詞に近かったり、動詞に近かったりするが、その内実はいろいろなものが含まれており、言語ごとに複雑なものがあるのではないかと想像できるのである。

1.9 「バンバラ語はマリで話されています」：受動文

英語を第一外国語として学んできた日本語話者にとって、「受動文」というのは、動詞が受動形になって、「能動文」の目的語が主語になる、というのが当たり前で、その他の欧州系の言語やスワヒリ語を学んでみても、やっぱり「受動文」は、動詞が受動形になって、目的語が主語になるものだと思う。しかし、世界の言語をみると、そのような「典型的な受動文」が欠けている言語の方が多いようで、WALS によると、57% (373 言語中 211 言語) が「典型的な受動文」をもたない (Siewierska 2013)。

西アフリカは「典型的な受動文」がない言語が多いが、そんな言語で「受動文」のような表現をしたい時には、「能動文」の主語を不定人称にする方法がよくみられる。不定人称には、3 人称の代名詞や単に「人」を表す語が用いられたりする。ヨルバ語では「彼ら」を表す 3 人称複数の代名詞が主語になって、「受動文」的な意味を表す。

(22) ヨルバ語の例

Wón	pa	olè	náà.	「その泥棒は殺された」
彼ら	殺す	泥棒	その	

バンバラ語も「典型的な受動文」がない言語であるが、不定人称を用いる方法とは違うやり方で「受動文」的な意味を表す。バンバラ語では、典型的な受動文と同じく、「能動文」の目的語が主語になるが、動詞の形は変わらないままである。下の(23a)は能動文、(23b) はそれに対する「受動文」的な文である。

- (23) a. Màliden-w bɛ bamanankan fɔ. 「マリ人たちはバンバラ語を話します」
マリ人 -pl PRES バンバラ語 話す
b. Bamanankan bɛ fɔ Màli la. 「バンバラ語はマリで話されています」
バンバラ語 PRES 話す マリ pp

上の例では、fɔ という動詞にどちらも「話す」というグロスをついているが、正確には、(23b)のほうは「話されている」のような自動詞の意味になる。つまり、バンバラ語では、形態変化なしに、他動詞としても自動詞としても用いられるということである。

同じ形で他動詞にも自動詞にも用いられると言えば、たとえば英語の open が He opened the door./ The door opened. のように、両方に用いられる例が思い浮かぶ。ヨルバ語にも、fí「開ける／開く」、fɔ「壊す／壊れる」、gbe「乾かす／乾く」などのように、自他同形の動詞があるが、これらの動詞は、「自然に／勝手にドアが開いた」というように、自動詞として用いられる時は、動作を受ける対象物が自然と変化する場合に限られ、そこには行為者の存在はない。

一方、バンバラ語の動詞は、「開ける／開く」や「壊す／壊れる」のような動詞だけでなく、「話す」や「殺す」、「食べる」など、必ず行為者が存在するような動詞でも、自動詞として用いられるのである。動詞 fàga「殺す」の例をみてみよう。

- (24) a. Dònso ye sàga fàga. 「獵師が羊を殺した」
 獵師 PERF 羊 殺す
 b. Sàga fàga-ra. 「羊が殺された」
 羊 殺す -PERF
 c. Sàga fàga-ra dònso f. 「羊が獵師に殺された」
 羊 殺す -PERF 獵師 pp

完了の補助詞は、他動詞の場合は ye で、自動詞の場合は接尾辞 -ra がつくことからも、(24b) が自動詞として用いられていることが分かる。また (24c) のように、行為者を表す名詞が、英語の by 句のように、現れることができることからも、これは「受動文」的な意味を表していることが分かる（つまり、(24b) は「羊が死んだ」のような意味ではない、ということである）。

ここで疑問に思うのが、(24b) の文が「羊が殺した」という意味にならないのか、ということであるが、バンバラ語では、自動詞の主語は「行為者」ではなく、必ず「対象物」でなければならない。それゆえに、(24b) の「羊」は「殺す」行為者ではなく「殺される」対象物にしか解釈されないのである。では、「踊る」や「遊ぶ」、「働く」など、一般に「行為者」が主語になるような自動詞は、どのように表現されるのかというさらなる疑問が浮かぶが、それらは、「踊りを踊る」、「遊びをする」など、基本的には他動詞として表現されるのである（詳細については、小森（2019）参照）。このように、バンバラ語では、自動詞がとる唯一の項（つまり主語）が「対象物」（正確には「経験者」も含まれるが）だけであるという規則から、「受動文」的な意味が、「自動詞文」で表されるのである。

1.10 「バンバラ語を学ぶ学生」：関係節

関係節というのは、名詞句（主名詞）を修飾する文（従属節）のことであるが、語順の類型論からはまず、主名詞が従属節の前にくるか後ろにくるか、という点が考えられる。日本語のように主要部後置型だと、主名詞が後ろにくるし、英語やスワヒリ語のように主要部前置型だと、主名詞が前にくるのが普通であるが、バンバラ語の主名詞は、前にも後ろにも移動しない点が特徴的である。主名詞は文中にとどまり、関係詞 min がうしろについて主名詞であることが示される。例をみてみよう。下の (25a) は平叙文の例、(25b, c) はそれぞれ、主語と目的語を主名詞にした関係節構文である。

- (25) a. Kàlanden bε bamanankan kàlan. 「学生はバンバラ語を学びます」
 学生 PRES バンバラ語 学ぶ
 b. kàlanden min bε bamanankan kàlan 「バンバラ語を学ぶ学生」
 学生 REL PRES バンバラ語 学ぶ

- c. kàlanden bε bamanankan min kàlan 「学生が学ぶバンバラ語」
学生 PRES バンバラ語 REL 学ぶ

バンバラ語では、他の多くの言語のように主名詞が前にいったり後ろにいったりせず、文中にとどまる。これは「主名詞内在型」(internally-headed) と呼ばれるタイプで、珍しいタイプの関係節である。WALS によると、世界の言語の 3.8% (824 言語中 31 言語) がこのタイプの関係節を作るようである（ちなみに、主名詞が前にきて関係節が後ろというタイプが 70% (824 言語中 579 言語) にのぼる）(Dryer 2013)。

また、関係節を伴う主名詞は、普通は一つの名詞句として、主節の一部になる。「バンバラ語を学ぶ学生」という関係節を伴う名詞句は、たとえば、主節の主語として「バンバラ語を学ぶ学生が来た」のように主節の中に現れる。一方、バンバラ語では、関係節を伴う名詞句は主節の中に現れず、外におかれる。例をみてみよう。

- (26) a. Kàlanden min bε bamanankan kàlan, ò nà-na.
学生 REL PRES バンバラ語 学ぶ DEM 来る -PERF
「バンバラ語を学ぶ学生が来た」
- b. Kàlanden min bε bamanankan kàlan, n tε ò dən.
学生 REL PRES バンバラ語 学ぶ 私 NEG DEM 知る
「私はバンバラ語を学ぶ学生を知らない」

上の例はいずれも「バンバラ語を学ぶ学生」という名詞句が前にきていて、後ろに主節がきている。関係節を含む名詞句は、主節の中では照応的な指示詞 ò「それ」によって照応されている。(26a) では主節の中の主語として、(26b) では目的語として現れている（その他の主名詞の例については小森 (2015) 参照）。

このタイプの関係節は世界でもさらに少なく、上に見た「主名詞内在型」の 31 言語中 7 言語であり、世界の言語の 1% にも満たない。これほど珍しくなってくると、既知の関係節と違いすぎて、教室では「ふ～ん」くらいの感想しか出なくなってくるが、「関係節」と言っても、欧州系の言語における「関係節」と、日本語などアジアの諸言語の「名詞修飾節」とではかなり違いがあるなど、類型論的には話題満載の項目なので、これをきっかけに、それぞれの言語における関係節や名詞修飾節について、考察を深めてもらうことができると考える。

2. おわりに

以上、特にバンバラ語の文法で、特徴的な点と考えられる項目をあげ、それぞれについて類型論的な観点からみてきた。実際の授業では、CD 付きの会話テキストを使って、簡単な会話文の発声練習や作文問題などをやりながら進めている。簡単な会話文と言っても、毎回こまごまとした文法事項を説明する必要があるが、そのような中で、上に見てきたような項目のところでは、類型論的な視点からの説明に時間を割き、受講生各自が知る言語について考察してもらっている。

しかし、学生の知識では限界があり、また言語学的な知識に乏しいと、たとえば、

それが動詞なのかコピュラなのか分からず、などということになる。こちらがある程度、それぞれの言語の、それぞれの文法項目の特徴を知っておかないと、スムーズな理解に至らない。ということは、結局こちらが、さらに他の言語の特徴も押さえておかなければならず、類型論の講義のための教員の勉強には終わりがない、ということになる。

その言語にあまり興味のない学生に対して初級の授業をおこなうなら、その言語が話されている地域の文化や社会的な話をふんだんに取り入れた方が、少しは興味深いかもしれない。この授業でも、バンバラ語が話されているマリの首都バマコの様子など、スライドで紹介する回もある。しかし、やはりそういった話は「息抜き」的なものであって、語学や言語の授業の本質を構成するものではない。

語学は好きでも、そこからさらに言語学に興味をもつ学生は、外国語学部といえども、それほど多くない印象がある。語学の授業を通して、言語自体の仕組みに興味をもち、言語学への関心と理解を深めてもらうためにも、言語類型論的な説明は一つの有効な手段となり得ると考える。

グロス

Be 存在を表す動詞	cl 名詞クラス (後の数字はクラス番号)	COP コピュラ
DEM 指示詞 (照応)	NEG 否定	NOM 名詞化接辞
PERF 完了	PERFP 完了分詞	POSS 所有標識
pp 後置詞	PRD 断定詞	PRES 現在
SM 主語接辞	1s 1 人称単数	2s 2 人称単数
		3s 3 人称単数

参考文献

小森 淳子

- 2012 「アフリカ諸語における「形容詞」について – ヨルバ語とバントゥ諸語を例に」、『スワヒリ & アフリカ研究』23 号、pp.167-185.
- 2014 「バンバラ語の「形容詞」の特徴について」、『スワヒリ & アフリカ研究』25 号、pp.130-144.
- 2015 「バンバラ語の関係節の特徴について」、『スワヒリ & アフリカ研究』26 号、pp.157-169.
- 2019 「バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について – 「受動文」から考察する」『スワヒリ & アフリカ研究』30 号、pp.33-48.

角田 太作

- 1991 『世界の言語と日本語 – 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版、東京。

松本 克己

- 2006 『世界言語への視座 – 歴史言語学と言語類型論』 三省堂、東京。

Comrie, Bernard

2013. “Ch. 98/99 Alignment of Case Marking of Full Noun Phrases/ Pronouns”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

マイナー言語を半期だけ教える時に教える 10 のこと（小森 淳子）

Creissels, Denis

2000. “Ch.9 Typology”, in Heine, Bernd & Nurse, Derek (eds.) *African Languages: An Introduction*, Cambridge University Press, pp.231-258.

Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.)

2013. *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at <http://wals.info>, Accessed on 2022-09-07.)

Dryer, Matthew S.

2013. “Ch. 90 Order of Relative Clause and Noun”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

Nichols, Johanna & Bickel, Balthasar

2013. “Ch. 59: Possessive Classification”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

Siewierska, Anna

2013. “Ch. 107: Passive Constructions”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

Simons, Gary F. and Charles D. Fenning (eds.)

2017. *Ethnologue: Languages of Africa and Europe*, 20th ed., SIL International, Dallas, Tex.

Stassen, Leon

- 2013a. “Ch. 117: Predicative Possession”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

- 2013b. “Ch. 120: Zero Copula for Predicate Nominals”, in Dryer & Haspelmath (eds.)

